

藤澤 啓明 さん

<はじめに>

おかげさまで中小企業診断士2次試験の合格に辿り着く事が出来ました。今振り返ってみても、よくもまあ合格したものだと驚くばかりです。

こうして合格に至るまでには、私も様々な合格体験記や合格者ブログを参考にさせて頂きました。恩返しをする意味も込めて自身の合格体験記を寄稿させて頂きます。

<合格までのスケジュール>

15年4月～ 一次試験学習開始 (大手資格校：通信講座を利用)

15年8月：一次試験受験

二次試験学習開始 (MMC様の2次直前対策：通信講座)

15年9月：一次試験合格

15年10月：二次試験受験

15年12月：二次合格・口述試験受験

16年1月：合格

<受験動機>

私は地方の製造業メーカーに勤めています。

購買先管理業務に従事しており、自分たちの使う原材料が滞りなく調達出来るように、取引先の経営状況確認や、品質改善のための改善活動の支援などを行います。経営者の方と接する機会も多く、時に相談を受ける事もある等、業務の多くの部分で中小企業診断士の知識やスキルにつながりがあると言えます。

特に昨今は、購買先企業を育成し共に向上を目指すというのが、購買における主流の考え方となっております。中小企業診断士の学習を通して、業務に活かす事の出来る専門的な知識を身に付けたいと考え、受験を決意しました。

<学習にあたって>

前述の通り、私は地方在住です。通える範囲に中小企業診断士を学習できる資格校はなく、学習手段は自ずと独学か通信学習に限られていました。

私がまず行った事は、試験攻略と学習方法の研究でした。通学であれば学習方法なども講師陣と相談出来るのですが、通信ではそういった機会はいまほありません。また学習開始時期が遅く(4月から)、あまりたくさんの学習方法を試している余裕はありませんでした。学習方法を決めたら、余所見をせずに貫徹するのが最も効率が良いと考えました。

そこで、合格体験記や試験体験を読み漁り、一次・二次それぞれの勉強方法とそれぞれに評判の良い資格校を検討し、決めた後は手を広げないように留意していました。具体的な方法は後述します。

<一次試験の攻略>

一次試験は短答式の単純な試験です。大量の知識と多少の応用力が問われる事となりますが、過去問も豊富にあるため、頻出論点や出題傾向が把握しやすく、対応も立てやすいと言えます。

その対応の立てやすさは、各資格校の立場でも同じ事が言えます。各資格校は把握出来るだけの過去問を分析の上、頻出論点の整理や試験問題予測を行い、教材の作成や講義を組み立てていると思われます。なにせ相手はそれをビジネスにしているプロですので、試験初心者が足りない頭で考えるよ

りもずっと適切に試験対策を行ってくれている（はず）です。

そのため、特に一次試験については独学よりも資格校などを利用した方が圧倒的に有利だと考えました。どの学校でもいいので一社を決めて、その学校の言われた通り学習していく方法が最も効率が良いと思われます。

<一次試験の学習方法>

前述の理由もあって、一次試験に関しては大手資格校の通信教育を利用しました。

さて、私の学習のスタイルは下記の通りです。

(1) 基礎知識のインプットとして講義動画を視聴

この段階では、とにかく見る事と、重要論点についてテキストにマーキングする程度です。

目的は全体像の把握です。途中、意味の分からない論点もありましたが、動画を止めることはせず、一科目分一気に視聴してしまいました。各論点や知識について「全く知らない」状態から脱却し、「そんな話を聞いたことある」状態に到達して次の段階へ移ります。

(2) 問題集に取り組む

心がけた事は、①繰り返し解く事と②漫然とは解かない事の2点です。

①繰り返し解く事については、そのままです。

学習方法について論じた本を読めば、どの本にも必ず書かれている点が「繰り返すことで覚える」という事です。1回より2回、2回より3回取り組むことで記憶への定着率が上がります。余裕があれば「エビングハウスの忘却曲線」といった論理に準じたタイミングで復習するとなお良いかと思えます。

また、繰り返し取り組んでいる内に、問題の傾向や自分の苦手論点などが自然と分かってきます。苦手な論点や整理したいポイントが出てきたら、サブノートに別途整理・書き込むなど「繰り返し知識に触れる」事でさらに知識の定着を図りました。

②漫然とは解かない事についてです。

繰り返し解いていると問題文自体を覚えてしまうので、正しい知識は分からなくとも「この問題の答えは①だ」という形で答えが分かるようになってしまいます。しかし学習の目的は、答えが①だと覚える事ではなく、なぜ①かが分かる事です。

そこで回答を考える際には、「この部分が違うからこの答ではない」「この部分が正しいからこの答は〇だ」という具合に、回答を選ぶ理由を常に考えてから選ぶようにします。そして答え合わせをする際には、選んだ選択肢が合っている事を確認すると共に、選んだ理由が合っている事も確認します。

まあこの作業すらも繰り返し取り組んでいると、どこが合っていてどこが違うのが覚えてしまうのですが、これは知識が定着したということなので良いのではないのでしょうか。

(3) 過去問・模試に取り組む

(2)で鍛えた知識が本番でも通用するかの腕試しです。(2)での正答率が90%に達していれば、過去問での正答率は60%程度にはなっているかと思います。模試ではさらに下がるかもしれません。

なぜそのようなことになるかという、個人的な分析ですが一次試験というのは、頻出論点・基本論点が約6割、応用問題が約3割、超特殊論点が約1割といった感じの構成になっています（もちろん年度や科目によって違いはありますが）。模試については、「本番より簡単過ぎて役に立たなかった」では意味がないので、少し難しくなっている印象があります。恐らく基本問題4~5割、応用問題4~5割程度になるかと思います。

問題集で対応できるのは、基本論点の90%と応用問題の30%程度までです。結果として、本番では

60%ほどの得点率となります。

少々不安は残るものの、十分に合格圏内と言えます。実際に私はこのレベルで本番に臨みました。

さらに対策を講じるのであれば、上級者向けの講義やプランを各資格校も用意しているので、それらのプランを利用してみればいいかと思います。ただし、「収穫逓減の法則」に従って効用は低下するものと考えられるので、余裕がない場合には基本問題集の正答率を上げることを優先した方がよいかもしれません。

ちなみに問題集と過去問を解くだけならば独学で充分ではないかとも考えられますが、講義を聞く事で、各論点の優先順位や過去の試験の様子、体験談、心構えなどを知る事が出来ます。一年に一度しかない試験にはメンタル面の準備も必要です。講師の方の熱意や体験談を聞いた事は、試験本番において役に立っていたと思います。

<一次試験当日>

本番当日の様子は様々な体験記にも描かれているので省きます。

今こうして振り返るからこそ、学習方法についても自信ありげに書くことが出来ますが、当日は不安でいっぱいでした。しかも今年は「情報システム」や「中小政策」等で応用問題の割合が多く、非常に焦りました。自己採点するまでは落ちたものばかり考えていました。

そして自己採点の結果…432点。(合格点は420点)

…マークミスがちょっとでもあれば不合格になりかねない点数に、果たして二次試験に取り掛かっているものなのかどうか、かなり微妙な感じで二次試験対策を始めました。

<二次筆記試験攻略法・MMCを選んだ理由>

二次筆記試験は、多くの合格体験記で難関と言われています。実際にその通りだと思います。

模範解答が公開されていないため合格可否の判定基準が分からず、結果として、様々な試験対策を講じてみても、そもそも対策が的を射ているのかも分からない。とにかく対策の難しい試験です。

二次筆記試験の対策として、私はMMCを選びました。

選択した理由は①合格率が高い、②添削対応がある、③回答の定型化メソッドがある、の3点です。

①合格率が高いということは、MMCが提供する学習方法なり回答メソッドなりがそれだけの的を射ているという事だと考えられます。ただし、それでも5割〜6割程度ということなので、ただMMCの教材に従って勉強しているだけでは不足します。そこで②のポイントの添削対応があります。

二次筆記試験は論述試験のため短答式とは違い、回答が正解か否か、独自では判断出来ません。自分が順調に学習出来ているのかを考える意味でも、回答を誰かに評価してもらう必要があります。特に地方在住者は他の受験者とのコミュニケーションが少ないため、回答を評価してもらう機会が乏しいといえます。添削は非常にありがたい対応でした。

そして最後に③回答の定型化メソッドです。

過去問を見れば分かる通り、毎年、多種多様な事業が事例として出題されます。今年度等はついに企業ではなく商店街までもが出題対象となりました。

いくら過去問に出題された事例について良い回答が作成出来るとしても、本番で出題される事例でも同じように回答作成出来ないのであれば意味がありません。合格のために必要な事は、どのような事例・業種が出題されたとしても一定のレベルで回答作成が出来るスキルです。

回答について定型化が行えるということは、どのような事例が出題されてもある一定レベルの回答が作成可能ということになると考えました。

<二次試験学習方法>

実を言えば、今年度一次試験合格の予定ではありませんでした。

今年度は可能な限り科目合格を取得しておき、来年度一年間、時間を掛けて二次試験の準備を行う予定としていました。ところが運よく一次試験に合格することができました。大変喜ばしいことです。

ただ問題が一つあり、それは二次試験の準備を全く実施していなかった事です。実質二か月で、全くゼロの状況から試験対策する必要がありました。

全くゼロの状況というのも誇張でもなんでもありません。8月12日（一次試験終了後）に初めて二次筆記試験の過去問に取り組んでみたのですが、一問も手が付けられませんでした。そもそも何を答えればよいか分からないといった状態です。

(1) 回答の模写

MMCから提供された過去問とその回答・解説を読みながら、5年分ほど回答の模写を行いました。

全く手の付けられない状態だったので、回答の感覚や文章の雰囲気を得る事を目的としました。これは一次試験対策における講義視聴（インプット）に該当する作業となります。

(2) 過去の合格・不合格回答の検証

(1)を経て自分でも回答を作成出来るのかを試してみましたが、当然、模範解答と同じ文章を書く事は出来ません。ただ冷静に考えれば、文章なんて人によって変わるのが当たり前ですし、模範的な文章を書ける事が合格基準とも考えにくいです。（それでは国語の試験です）

やはり何が正解か分からないままでは、対処のしようがありません。可否基準について仮説を持つ必要があると考えました。何が出来れば合格となり、何が出来ないと不合格となるのか、ネットや書籍などを巡り、可能な限り「再現回答」を収集し、比較検証を行いました。

その結果、以下の事が合格基準ではないかと仮説を立てました。

① 与件文に準ずること

合格した再現回答において何か特殊なキーワード（コースリレーテッドマーケティングやデシル分析など）が出てくる時は大抵、与件文にも同じ表現がある場合です。それ以外で深い知識を要するような突拍子もない単語が出てくる割合はかなり低いように思われました。また、回答文の根拠となる部分（「〇〇なので、××を行う」の「〇〇」の部分）はほとんど与件文からの抜き出しとなる傾向があります。

つまり、与件文を適切に読み取る事が出来れば、多少知識や発想が不十分でも合格回答が書けるといことです。

② 多面的に書くこと

合格回答と不合格回答の最大の違いは、切り口の多さです。

合格回答は「～～面で〇〇、**面では××」という表現や「〇〇や××等を行う」という書き方が多く見られます。反面、不合格回答は「〇〇を行う」という一面的な回答を、深く長く書いているように思われました。

逆を返すと、合格回答は出題者が拾ってほしいであろう論点や話題をちゃんと拾っている。不合格回答は出題者の意図を捉える事が出来ていないという印象を受けました。やはり与件文をどれだけ読み込めるかが大切なのだと思います。

③ 設問に対して回答していること

「留意点はなんですか？」という設問に対して、「〇〇というメリットがあります。」と答えれば当然不合格になります。冷静にちゃんと「留意点」を答えていれば、多少切り口が不足していても評価の高い回答になっているように思われます。解答を考えているとつい設問を忘れてしまう事もありま

すが、解答欄へ書き始める前に設問へ立ち返る事が重要です。

以上3つが、私が合格基準として見られているのではないかと考えた主なポイントです。

(3) 過去問による練習

(2)の仮説に基づき、過去問に取り組みました。

自分の回答を作成し、回答解説と比較検証する際は、①模範解答と回答する主題がずれていないか（「留意点を問う」設問であれば「留意点」を回答出来ているか）②模範解答と比べてキーワード（切り口）の不足がないか、以上2点を確認しました。

ズレたり不足していた時は③与件文や設問を見直し「何を読み落としたか」「どう読めば不足したポイントを抑える事が出来たか」を反省し、必要に応じてサブノート等にまとめました。MMCから教えて頂いたMCサークルや回答の金型化は、与件文を分析して多面的に書く上でとても有効なツールとなりました。

ちなみに事例Ⅳについては他の事例と毛色が違うため、別の学習方法が必要となりますが、基本的に計算練習が主体となります。こちらは数をこなして公式を覚え、計算間違いを減らす努力をしました。

(4) 添削・模試の受講

添削や模試で自分の仮説が正しいかどうかの検証です。通信で受講可能な模試やMMCの添削で、自分の仮説を確認しました。実を言えばあまり安定した結果ではありませんでした。二社は概ね合格圏内という評価でしたが、もう1社はB判定となっていました。

それなりに手ごたえを感じてはいたものの、不安を残す状態で本番に向かう事となりました。

<二次筆記試験当日>

試験本番、事例Ⅰに取り組んだ段階で、初めて致命的なミスに気づきます。

本番を想定した練習を一回もしていなかったため、試験時間80分の時間の使い方について、何も戦略を立てていなかったのです。おかげで事例Ⅰの最後の設問は、時間不足により殴り書きとなりました。

事例Ⅱ以降では多少時間を意識したものの、そもそも問題を解くのも必死です。満足のいく時間の使い方が出来ずに悲惨な思いで取り組む事となりました。事例Ⅳに至っては、冷静になれば普通に解ける問題にも戸惑うほどに精神的に疲弊していました。

やはり本番を想定した練習は事前しておくべきです。

回答を書く練習も重要ですが、同じくらい、限られた時間で書く練習や事例4つを一日で取り組む練習も必要です。私はこの練習を全く怠っていました。

そうして二次筆記試験が終了。私は不合格を確信して帰路につきました。

<二次口述試験>

二次筆記試験修了後、12月11日（二次筆記試験合格発表日）までは中小企業診断士試験の事など頭の片隅にも置かず仕事ばかりしていました。もう完全に不合格のつもりだったので、口述試験対策などは一切しませんでした。実を言えば、27年度二次筆記試験の模範解答すら確認していませんでした。

12月11日も事実確認のつもりで合格発表を確認。そして、まさかの合格。あまりにも自分の目が信じられず、周囲の人間に2度3度確認したほどです。

ここから慌てて口述試験の対策を行いました。

基本的には27年度事例の確認と関連知識の復習です。模擬面接などは、さすがに通信教育では限界があるため、東京で開催されたMMCの模擬面接セミナーなどにも参加しました。

例年の合格率99.5%以上とはいえ、自分が0.5%側にならない保証などありません。よく「無言」と「欠席」さえ避ければ合格するとは言われますが、まったくの想定外の質問があれば、無言にならざるを得ないかもしれません。ここまできて不合格になるわけにはいかないと、かなり念入りに事例研究を行いました。

試験当日はあっけなく終わりました。

想定していた二次筆記試験の事例からの出題ではなく、それに関連した一次試験の知識からの出題が中心でしたが、落ち着いて面接官と会話しながら終える事ができました。

<合格への留意点>

以上、私が合格に至るまでの軌跡となります。我ながらよく受かったものだと思うほど、綱渡りの試験対応となりました。あまり参考にならずに申し訳ありません。合格はたまたま運が良かっただけのようにも思われます。

そんな私が「合格の秘訣」などという事を語るのもおこがましいとは思いますが、振り返ってみて一点だけ思い当たる留意点があります。

それは、学習中から常に「中小企業診断士になったつもりで考える」ということです。そして、試験のために学んだ知識やノウハウを、実際に使ってみることで。

私は既に業務の中で経営者の方と接する機会があったため、診断士となった時に経営者の方と話す場面を思い浮かべる事が出来ました。私の頭の中には「空想の経営者」が形作られており、一次試験での新しい知識を得た時や二次試験の設問を考える時など、その「空想の経営者」に対して、どのように話をするだろうかと考えながら学習を進めていました。

特に二次試験では有効な考え方だったと思います。

二次筆記試験における与件文というのは、つまるところ「経営者による会社の説明や相談」なのだと思います。そして各設問は「経営者からの質問」にあたります。中小企業診断士として経営者の相談にのっているものと仮定して解答を考えてみると良いかと思います。

二次筆記試験学習方法の中で「①与件文に準ずること」と書きましたが、それはつまり「相談相手となる経営者の話を元にして考える」ということです。いかに有効な支援策を提言出来たとしても、経営者自身が考える自社の強みや弱み、これからやっていきたい事など「経営者の思い」を無視しては、納得をして聞いて貰う事が出来ません。

「②多面的に書くこと」についても、相手に納得してもらうように分かり易く話すための手段だと考えられます。例えば、人事管理の方法について悩んでいる所に対して「成果主義を導入すべきです！」とだけ提言しても相手は判断出来ません。「成果主義には〇〇というメリットがあります。××というデメリットがありますが、△△という点に留意して導入すべきです。」と言われれば、相手も納得して判断出来ます。

私が再現回答を分析して考えた合格回答の基準というのは、結局のところ「相手の話を良く聞いて」「説得力をもって話す」ということに他なりません。そのように考えてみると、二次試験というのは、

知識を問う試験ではなく、中小企業診断士としてのコミュニケーションスキルを測る試験なのではないかと思えます。

思い返せば、二次筆記試験において私の学習量は本当に不足していたと思います。学習量が足りず知識に不安があったからこそ、与件文を良く読んで素直に対応するしかありませんでした。そのことが逆に功を奏したのではないかと思われます。

コンサルタントというと、難しいフレームワークを駆使しながら考えつくされたビジネスプランを提案する姿が思い浮かべられますが、それを活用出来るのは大企業だけなのでしょう。資本もノウハウも乏しい中小企業に必要なのは、まさしく伴走型の支援であり愚痴や相談の出来る身近な話し相手ではないでしょうか。

どのような資格試験でもそうですが、合格したその日に「中小企業診断士」に変身するわけではありません。学習を重ねる日々の中で「中小企業診断士」になっていくわけです。試験はその「中小企業診断士らしさ」の習熟度合いを測るものであり、一定以上の習熟度合いに達した人間が合格するわけです。

ということは試験では、如何に「中小企業診断士らしく」経営者の悩みへ真摯に答えられるかが測られているものと考えられます。そうした試験への真の試験対策とは、「中小企業診断士」になったつもりで日々過ごしてみることなのだと思います。

<最後に>

最後に偉そうな事を書きましたが、結局のところ合格出来た真の理由は、周囲の支えや、講師の方々のご指導のおかげです。

講義動画や模試添削を通して学んだ知識やノウハウ、合格体験記を通して得た情報。それらを残してくれた先達の「後輩を少しでも何か助けてあげたい」という思いに連れられて、私もようやく合格へと辿り着く事が出来ました。この場を借りてお礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました

中小企業診断士としてどんな活動をしていけるのか、今は皆目見当もつきませんが、今回の経験や学んだことを通して多くの方と助力となるように精力をしていければと考えています。